

論文番号 74

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

健康管理への活用を目的とした基本健康診査成績による生命予後の検討

執筆者

入江ふじこ、西蓮地利己、磯 博康、嶋本 喬

掲載誌 (番号又は発行年月日)

日本公衆衛生雑誌 2001; 48: 95-108

キーワード

基本健康診査、危険因子、死亡、追跡調査、老人保健法

要旨

(背景) 全国的に老人保健法に基づく基本健康診査が行われているが、受診者を追跡して危険因子や飲酒や喫煙などの生活習慣との関連を検討した報告は少ない。

(方法) 茨城県内の 38 市町村における平成 5 年度の基本健康診査受診者のうち、脳卒中既往歴を持たない 40-79 歳の 96,664 人 (男性 32,705 人、女性 63,959 人) を対象として、健診情報と住民基本台帳および人口動態死亡票により、受診後 5 年間の生命予後の追跡調査を行った。Cox の比例ハザードモデルを用いて、年齢とその他の関連要因を調整した。転出はうちきりとして扱った。

(結果) 平均 5 年 2 ヶ月の追跡の結果、死亡者 2,937 人 (男性 1,710 人、女性 1,227 人) を確認した。全死亡と有意な関連を認めたのは、喫煙 (男女)、男性の 1 日 3 合以上の飲酒、女性の 1 日 2~3 合の飲酒、高血圧 (男女)、総コレステロール低値 (男女)、HDL コレステロール低値 (男)、BMI 低値 (男女)、高血糖 (男女)、クレアチニン高値 (女)、尿蛋白陽性 (男女) であった。疾患別にアルコール摂取量と死亡との関連を検討すると、男性の全循環器疾患死亡は 2 合未満の飲酒で有意に低かった。がん死亡は男性の 3 合以上飲酒者と禁酒者と女性の禁酒者で有意に高かった。

(考察と結論) 基本健康診査で判定される様々な健診所見や生活習慣が地域住民の死亡予後と関連することが明らかとなった。特に 1 日 2~3 合の飲酒が女性においても全死亡のリスクを高めていたことは新しい知見である。男性については、1 日平均 3 合以上で初めて全死亡のリスクが上昇するのに対して、女性ではより少ない飲酒量で死亡リスクが上昇しており、公衆衛生学上重要な所見である。ただし女性の 3 合以上飲酒者の頻度は少なく、1 日 2~3 合のカテゴリーからの実死亡者数も 6 人に過ぎなかったため、どういう死因で総死亡リスクが上昇しているのかは不明であった。